

対中取引、忘れ得ぬ一コマ

榎原茂樹

班門弄斧

歴戦の諸先輩を前にして、若輩の私が報告をするは正に、班門弄斧です。

昨年総会で何か話しようとする藤本先生の要請があり、重たい気持ちであったところ、伊地智先生の急逝による追悼会となった。これで、私の話はお流れになったと思っていたところ、今年に繰り延べたに過ぎないとのことで、今日となった次第です。

どんな話が良いか迷いましたが、藤本、武吉両先生にもご意見を求めたところ、経験談が良からうとのことで、昨年秋母校である神戸外大の中国学科卒業生全体の同学会で、私が講演しました「昨今の日中経済関係」の中より、そのプロローグで紹介した中国にまつわるエピソードの幾つかを織り交ぜてお話しすることになりました。

お話に入る前に、私の略歴とそのキーワードを先ずご紹介し今回のプロローグとします。

プロローグ

神戸外大 坂本先生、中国訪日団、中国映画

昭和40年卒。

坂本一郎先生：発音練習、仲人

南漢宸訪日団（当時中国銀行総裁）：歓迎会、“青年”万年筆、田崎真珠

中国映画：「達吉和她的父親」シナリオ、海員会館、オープンリール録音機、末延先生

ニチメン 中国滞在延べ12年、単身赴任

昭和40年入社、平成8年退社。31年勤務、単身赴任18年半。

訪中滞在日数：累計12年、駐在：北京、上海、青島、（ウルムチ、天津）

日中経済貿易センター JCCNET、信用調査

JCCNET：インターネット利用の有料サイト、日中貿易実務レベルでの利用価値大

信用調査：中国企業（含む三資企業）の信用調査

外大講師 ビジネス中国語（大阪・神戸外大）

神戸外大：商業中国語 昨年よりスタート 社会に直結した人材育成

大阪外大：ビジネス中国語 今年よりスタート 昼間・夜間 熱意大

対中取引、忘れ得ぬ一コマ

初訪中と文化大革命

鉄砲持ってるか

1967年春に初訪中、時は文化大革命が蓬勃开展。中山大学キャンパスでの日中青年交流。中国側青年よりの質問“先生は鉄砲持ってますか”、日本側が答えに窮していると“毛主席教导我们说「枪杆子里面出政权」、なぜ鉄砲を持って反動派を倒さないのですか”と。最初に強烈なカルチャーショック。

紅衛兵と毛語録

商談に同席する紅衛兵、「世界是你们の、也是我们的、但是归根到底是你们的。你们青年……」、毛語録の引用合戦に圧倒される。負けてはならじと、後日、毛語録の成語、慣用語を抽出チェック、72文例に纏めました。語録の歌も併せ習得。

周総理との握手

日中国交回復の前夜、北京に半年交代の駐在時、L T貿易の交渉団の一員（機械商談）として現地参加時、日本よりの大豆交渉団（ニチメンより渡利課長後社長）と共に中国側の招待で北京政治協商会議講堂で現代京劇を観劇時、幕間の休憩で貴賓室に居たところ、驚いたことに周総理が突如現れ、我等日本よりの交渉団を接見されることになった。我々より緊張したのは接待単位の先生方であった。大豆は金光石氏、機械はベアリング担当の曹龍昌氏が当日アテンドされていた。

周総理は我等団員一人一人に眼を合わせつつ握手された。私も緊張しつつも中国語で“能见到阁下,感到光荣”とか何とか言いましたが、それに対し周総理はナント日本語で“今晚”はと応ぜられ正に感激不尽でした。総理の手のひらが大変軟らかくで分厚かったことがとても印象的でした。

観劇より宿舍の新僑飯店に帰り、その事を同志に言ったところ、驚いたことに彼等が我先にと私に握手を求めるではありませんか。思うに当時、文化大革命で相当厳しい環境にあって、民衆の周総理への敬愛と期待の強さに二度ビッ

クリした次第です。

人間万事塞翁が馬

火力発電プラント

1973年夏、唐山火力発電所新設プロジェクトに東芝・IHIと組んで商談。国交回復後初の大型火力プラントの引き合いとて、日立グループとの熾烈な受注合戦を展開。私はタービン部門の技術通訳として参加しましたが、最終的には我がグループは敗退しました。

唐山大地震

成約に至った日立グループは成約後、建設サイトの唐山に担当者を送り込み建設への準備を進めていた。そこへあの大地震が襲い、日立と関係商社の方が亡くなられた。今にして思うと、あの商談に成功しておれば、行き掛り上、私が現場に派遣され、同じように遭難したに相違いありません。商談敗退は悔しい限りではありますが、それ故に命が救われたこと、正に人間万事塞翁が馬を身にしみて体験、亡くなられた方の冥福を祈るのみでした。

談判四方山はなし

ノウハウはコピー代？

70年代の後半に入り、中国はカラーテレビの国産化を目標に、そのキイコンポーネントであるブラウン管の製造プラント導入を本格的に始めた。中国政府は日本よりの導入を最優先し、例によって東芝と日立を競わせる手法に出た。わが社は東芝グループを担ぎ、技術交流、商談に臨んだ。技術面でのすり合わせを終え、愈々価格ネゴに入った。ノウハウ料の評価につき、中国側はノウハウ料はコピー代で良い筈と主張し、日本側は開いた口が塞がらず、議論は噛みあわずハードネゴとなった。中国側の言い分は、ノウハウと言うものは売れて幾らかであり、売れなければ一文の儲けにもならない、競争相手にもっていかればそれまで、今回コピー代だけでも貰えればそれだけ儲かることになると言うものであった。中国が未だ国際取引のルール慣用に慣れていないという事を差し引いても余りもの暴論（策略？）に日本側一同対応に難儀した次第です。

好吃么

70年代の後半、中国よりの食材の開発輸入が始まった。わが社は他社に先駆け、漬物類の開発輸入を目指すことになった。当時は今ほど自由な行き来も尠ならず、技術交流も思うように運ばなかった。まず、キュウリの漬物から手がけようとして、加工にかんする交流を経て、ようやく試作品が出来上がった。広州交易会の席上、中国側より糧油食品総公司、分公司、加工工場の面々が出席、日本側よりユーザーも交え、試作品が出され、試食とあいなった。出されたサンプルを日本側が先ず試食したところ、漬物とは程遠い代物であった。それを中国側にも席上同じように食して貰ったところ「好吃么」と言うではないか。素材、塩加減はマニュアル通りであるが、歯ざわりが全く無く、噛めばグニャとするばかりで、いわゆる歯ごたえが無いと言葉を尽くして説明すれど「还是好吃么」を繰り返すばかり。日中間の食習慣、貿易慣習など乗り越えるべきハードルが高く、この商談が実るまでには、それから数年の歳月を要しました。

失策と試練

大豆ファームオファー

中国は今では大豆は輸入国となったが、国交回復以前より中国の東北地方で取れる黄大豆は対中輸入の主要商品の一つであった。文革覚めやらぬ70年代の初め、北京に一人で駐在時、10月9日の午後、糧油公司より、数千トンのファームオファーを受けた。オファー期限は10日午後5時。当時は日中間の通信は電報で、普段は翌日配達のLT電報で発信しているが、今回は緊急でもあり加急電報を東京本社に打った。私は毎日、その日の出来事を全て夜、整理し、あくる日に備えていた。夜12時近くになり、今日の大豆のオファーの件を記録していて、10日が日本の祝日であったことに突然気が付き、顔面蒼白となった。その時点で日本よりの返電が届いていないということは、会社には電報が着いたものの、誰も見ぬまま、休日に入ったものと思われる。このままでは折角のオファーが流れ商機を逸することとなる。日本は既に午前一時を回っており、糧油公司にも連絡も取れない。明日を待たざるを得ないことは重々判っていても、それから殆ど寝るにも寝れず、おまけに緊張の余りか、おデコにタンコブのようなものが出来、それが大きくなりだした。明るる朝、先ず糧油公司に連絡し10日の祝日の失念を伝え、オファー期限の延長を懇請し、11日までの延長の確認を得た上、本社の営業責任者の自宅に緊急の国際電話を

入れ、事なきを得た。オデコのタンコブはこれにて凹み出し、11日の久しぶりの大量成約をもって完全に元のオデコに戻り、本当にヤレヤレ的一幕でした。

毛布で電話

1967年、初参加の春の広州交易会。私は入社3年ながら、事務局詰め兼物資関係の担当として参加した。当時の日中間の通信は国際電報が主流で、電話は殆ど利用されることはなかった。しかし、商談が煮詰まる交易会期間の終盤には、電話も利用された。しかし、当時の電話は香港経由で、音声は互いに聞き辛く、通話料が高い割には用をなさないこともしばしばであった。会期閉幕間際のある日の午後、団長の指示で関係者が日本の本社に最後の手段の電話を順番に掛けることとなった。私も物資担当者として最後のほうで利用させてもらった。しかし相手の声が殆ど聞こえず、こちらの言うことが相手に伝わったのかどうかも確認も取れず、何度も大声で同じ事を繰り返すばかりであった。当時のホテルは冷房もなく、クソ暑い中、少しでも相手の声を聞き取るべく、夫々が部屋の毛布を頭から被り汗だくになりながら奮闘した。因みに私の最後に相手に言った言葉はナント「今言ったこと、念のため電報いれるので、それ見て返事下さい」でありました。

騒音と灼熱

初めての北京駐在は文革最中の1967年でした。春の広州交易会終了後、天津での日本科学機器展覧会をアテンドの後、北京に入ったのは6月で、宿舎は新僑飯店でした。当時、ホテルの南側にあった東西に連なる城壁が壊され、中国初の地下鉄建設工事が始まっていた。工事は北京駅から崇文門に掘り進められ、更に前門に向かって、巨大な溝がオープンカットで掘り進んでいました。工事現場は事務所の目の下で、相当の騒音と砂埃であった。更に輪を掛けて往生したのは、工事現場を挟んで南側にある掘った砂の処理場である。ここでは24時間昼夜を問わず旧式のブルドーザーがケタタマシイ音をたてている。今でも耳に残っていますが、深夜にも関わらず、砂山に押し上げる腹にこたえるエンジン音、かきあげた山の頂きでブレードを揺らす「キャッキヤ」という音、その後砂山をバックで駆け下りるキャタピラーの異様な音、この3つの異なる騒音が幾度となく夜通し繰り返されるから、たまったものではありません。今なら、文句の一つも言えませんが、当時の異様な外部環境では我慢するしかありません。しかも真夏、ホテルには冷房なども無く、駐在の仕事は深夜に及

び、疲れはて寝入った時のみ騒音と暑さから開放される日々が延々と続きました。

私は負責人

泰山ロープウェイ

70年代の末、改革開放の具現の一環として、中国よりロープウェイの引き合いを受けました。設置場所は天下第一山の泰山。わが社はゴンドラを東急車輛、駆動装置を東京索道と組み、欧州、日本他社との激戦の末、受注に成功しました。中国では初めての本格的ロープウェイの導入とて、歴史史跡とのマッチングや技術、安全性そして値段については厳しい注文が相継ぎました。中天門から南天門まで30人乗り、秒速5mと当時では世界最新鋭の装置でした。成約後、詳細設計のため、メーカーの技術者と共に何度か現地に足を運び、支柱設置と路線調査で道なき道を藪漕ぎし、学生時代、ワンダーフォーゲルをしていたこともあり、束の間の青春が甦りました。

孔府

最終設計が終わり、中国側の招待で曲阜の3孔に案内された時のことです。代代孔家の住まいであった孔府では、その責任者が我等を自らガイドしてくれました。建物は文革を経ても良く保存されており、至る所に“厳禁煙火”の張り紙が貼ってあった。孔家歴代当主の妻の肖像画を展示している部屋に入ったところ、この責任者先生がこともあろうにタバコに火をつけモクモクとやりだしたではないか。私が思わず、張り紙を指差し注意を促したところ、何と曰く“我是負責人”、とて平然。私は、中国の慣習常識とは何か、負責の意味は何かなど随分考えさせられた次第です。

リスクはチャンス

天安門事件

1989年6月4日の事件当時、私は北京事務所の所長として北京に駐在していた。3日未明の事件の直前、私は宿舍の民族飯店のカーテンの隙間から、復興門より入城した解放軍の動きを間じかに、先日亡くなった松村誠三氏と共に、固唾を呑んで見つめていた。その時の状況はこのテーマを外れるので、別の機会に譲るとして、あくる日の朝、余りに気になることから、行ける所まで

と徒歩で東に向かったが、西単より東は軍の規制で行けず、交差点辺りは焼け爛れた路線バス、戦車に踏み敷かれ累々たる自転車が放置され、異様な光景でありました。

事務所一時閉鎖

事件後は、市内交通寸断で、事務所への出勤は私を含め全駐在員が全く出来なくなり、駐在社員15名との連絡は電話のみに頼らざるを得なく、その後、本社よりは外務省の勧告を背景に、家族も含め全員、直ちに一時帰国せよとの指示を受けました。私は個人的には全員が帰国避難するまでもないと思ってはいましたが、万が一を考え、事務所の一時閉鎖と全員の一時引き揚げを決意し、それに全力を投入しました。

当時、社員と家族併せて30名の宿舎は4箇所に分かれおり、私は終日、電話のみで全員に連絡し、耳が受話器で腫れ上がった。無事に出国させるため、全員を空港への経路が確保しやすい崑崙飯店に移動させました。また市内の交通事情は極めて悪く、ガソリンスタンドは全て閉鎖され、タクシーは街から姿を消していました。北京空港までの足は社有車に頼らざるを得ず、夫々の車のガソリン残量を確認した上、先ず子供のいる家族、夫婦のみ、単独身赴任者の順に帰国させました。最後に私と総務部長の二人が、建国門外の長安街南側にある事務所の一時閉鎖に向かうことになりました。

崑崙飯店から事務所への往復は、空港までの社有者のガソリン残量を確保するため、タクシーをと考えましたが、タクシーは尽く姿を消してしまい中々捉まらず弱っていた。運良く、そこへタクシー一台が崑崙飯店に入ってきた。運ちゃんは勿論会社とは関係なく、危険を承知の一匹狼である。事務所往復を告げると、400元貰わないと行けぬと言う、普段なら精々20元のところ何と20倍もの吹っかけである。タクシーはこれを逃すと何時来るか全く予想も立たず、さりとて言いなりに支払うのは、杓に触るので、ここは強かな運ちゃんとハードネゴをして、結局半値の200元（勿論後払い）で手を打ち、事務所に向かいました。

国際大廈より建国門外大街を横切れば事務所のある芦堡大廈である。ところが、この道を横切る人と車は今や皆無の状態、建国門の交差点に不気味な戦車が3台、砲塔を水平にこちら東を向いており、何か事があれば発射せんとばかりの姿勢で並んでいました。道路を渡らねば事務所には行けずとて、車で道

を横切り、もしここで打たれれば 1 巻の終わりと思うと、私は干からびた喉に生唾の痛みを痛烈に感じました。事務所ビルの下で、運ちゃんを待たせ事務所に入り、事務設備の確認や戸締り、そして客先、現地社員への一時帰国はするが必ず戻るとの張り紙をして、作業を終えました。そして再度決死の道路横断の末、無事崑崙飯店まで帰り、運ちゃんとは堅い握手を安堵の笑顔でかわしました。

工人魂

中国国貿促の設立 40 周年記念行事にニチメン田中社長が招待され、北京に随行した時のこと。全ての行事を終え、タクシーで頼まれていた買い物をしたあと、そのまま宿舎の長富宮飯店に社長を迎えに行った。車を捨て、社長を出迎えたところで、先程のタクシーにカメラを忘れたことに気がついた。カメラには今回社長訪中の全てのスナップが入っており、帰国後は社内広報誌に写真入で掲載する予定であった。私は慌てた、社長は“どうした？”と。時は中国が市場経済に突進中、街には拝金主義が溢れ、タクシーの後部座席に置き忘れの外国製カメラは最早戻ることにはあり得ないと思われました。半ば諦めつつも、ホテルの玄関に乗り捨てたタクシーの姿を追い求め、そしてホテルのフロントにも事情を伝え、協力を求めました。

むなしい時が過ぎ去り、社長の帰国への出発の時間が迫った。私は未練がましく最後のチャンスとて玄関先で来ぬ車を待った、その時でした。あのタクシーがやって来るではありませんか、そして、あのカメラが司機の手にしっかり握られてるでは無いですか。感謝感激の一瞬でした。そして、北京には尚も素晴らしい新中国の工人魂を持った労働者が居たことに心の温もりと無常の喜びを感じた次第です。